

## プロテイエヌスの絶對に就て

久松 眞 一

哲學は最終統一の學である。即ち最終の原理によつて一切を學的に説明せんとするものである。プロテイエヌスの哲學に於ては、この最終原理となるものは、彼が一と稱して居るものである。この一がいかやうなものであるか、又一切のものゝ原理として、いかにしてかゝるものがなければならぬかを論理的に説明しようとするのがプロテイエヌスの哲學の眼目である。併しながらプロテイエヌスは單なる理論によつては一が存在しなければならぬといふことは推究されうるも、一そのものゝ具體的狀態は知らるゝことができぬと考へた。一の具體的狀態は吾々の理論もしくは思惟によつてではなくして、吾々自身が一そのものと合一すること、即ち、一の三昧に入ることによつて甫めて知らるゝことができるかと考へた。しかうして彼は彼自らこの三昧によつて一を體驗し、宇宙の絶對統一をば自己に證したのである。かゝる體驗はすでに哲學の領域を脱して宗教の境地に入つたものといはねばならぬ。それ

故、プロテイヌスに於ては、一は純粹に哲學的なる根本原理ではなくして、宗教的の絕對者即ち神とも見らるゝのである。もし然らば彼の哲學は、彼の宗教的體驗たる神をば客觀的、概念的に叙述し且基礎づけんとする神學であつたと見ることもできるであらう。恐らく彼に取つては一なるものゝ存在は理論的哲學的の論證によつてよりも、むしろ宗教的體驗によつて確實なるものであつたに相違ない。併しながら、それにもかゝはらず彼が一の存在は體驗によつて確實であるとはいはずして、一の存在せなければならぬ所以を哲學的に論究したのは、蓋し體驗による一はその限りに於て個人的、主觀的であるから、それに客觀的基礎を與へようとしたがためであらう。この態度は神學に於て辯護學が取ると同じ態度であるといふことができる。かやうに見て來るとプロテイヌスの哲學は單なる哲學としてのみならず宗教哲學として深い意義を持つて居るものといはねばならぬ。それで今私は次にその一がいかなる性質のものであるか、いかにしてそのやうなものが存在せねばならぬか、更に又いかにして一の體驗に達することができるかを述べてみようと思ふ。

通常、吾々が一と稱して居るものは數の單位である。この單位が集合して多を成すのである。この場合に、この單位が純粹に數の單位として取扱はるゝ爲には、それはその内に多を含むものであつてはならぬ。それは純粹に空虚にして無内容なる量的のものでなければならぬ。然らざれば數といふことは不可能なことゝなる。吾々が日常、異質的な事物を數へる場合にも、數へらるゝものゝ異つた性質とか内容とかいふやうなものは考の外に置かれて居る。併しながら、プロティヌスのいふところの一は彼自身が明言して居る如く「二といふ數を構する單位の一ではない」。數に於ては單位としての一の集合たる一定數より見るときは、その一はその一定數の部分であつて、その内に含まれたるものと異なる。併し一は決して他のいかなるもの部分ともなるものではなくして、却つてありとあらゆるものがその内に内在し、その外に出ることのできぬものである。又、一は單位の集合である一定數を全體として見た時の統一といふやうなものでもない。この場合には全體は部分の集合であるけれども、一に於ては部分が先づあつて、而して後に全體が生ずるといふやうなことはない。却つて全體が部分に先行するやうなものである。又數に於ては全體として見られたる單位の一定集合は可分であるけれども、一は絕對に不可分である。

一、はその統一内容を内包するけれども、その内容の單なる集積ではないからして内容に分割されることはできない。勿論、内容は一として一、を持たぬものはないけれども、その内容は一ではない。又、内容が各々一、を持つことによつて一に増減はない。

更に、一は凡てのものゝ原理であり、母であつて凡てのものに先行する一切であるけれども、凡てのものをそれ自身の内に、内包する全體としての存在物と見ることはできない。かゝるものはその内に凡てのものを含むといふ點に於て一と稱することはできない。それで一、が統一内容を内包するといふことは一と異なる形に於てその内容が一の内に包まれて居ると見られてはならぬ。一に於ては絶対に一であつて一と異なる内容が在つてはならぬ。恰も、大海より發したる雨滴は無數の差別性であるけれども、大海に朝宗しては絶対平等の一大水と化し去るが如く、凡ての雨滴の全體としての存在は全體として一である如く見えるけれども、その一は無數の統一としての一であつて、純粹に、一と稱すべきものではない。この場合に大海こそ一と見らるべきである。

凡てあるものは一によつてあるのであるけれども、それ等は皆多であつて一ではない。觀念も形式も多であつて一ではない。叡知、ことに自ら自身よりも外的なる

ものを決して見ることのない叡知さへも一と稱せらるゝことはできぬ。何とならば、もしも一が叡知的に知覺する時には、その知覺さるゝものは叡知に對して先行的のものでなければならぬ。よしたとひ叡知が同時に能知であり所知であるにしても、そのすでに二重である點に於て能所の二を存するから一と稱せらるゝことはできぬ。されば、一は叡知の能でもなければ所でもない。又、能所一つになつたものでもない。却つて能所に先行するものである。従つて一切の主觀、客觀を超越するものである。又、一は靜でもなければ動でもない。時間でもなければ空間でもない。一切の存在を超越するから彼と此とかいふこともできぬ。

かくの如く、一は一切の存在を超越したるものであつて、一切の性質のどれでもないけれども、決してこれを全く空虚なる無と考へてはならぬ。一はその内より一切のものをば無限に流出する源泉であつて、これなくしては一切のものがその存在の基礎を失ふどころの存在の第一原理であるからである。又、一が何物をも意識せぬ故を以て、一を無意識であると思へてはならぬ。何とならば無意識といふことは意識するものがあつてそのものが、他のもの即ち意識さるゝものをば意識しない状態である。然るに今、一は純粹に一である。それ故もしも一が無意識であるといふ場

合には、一以外に意識さるゝものを豫想することゝなる。然らば、かやうなものはもはや一と稱せらるゝことはできぬ。それ故無意識といふことは一に於ては意義をなさぬことゝなる。一はむしろ越意識的である。一が叡知的でないといふ理由で無知であるといふことも同じ道理によつて意義のないことである。かく一は叡知的でないから自分自身を知るといふこともない筈である。自分自身を知るといふ時は、たとひその知らるゝものが自分自身であるにしても、知る自分自身からは他のものである。然らば、この場合に自分自身を知る自分自身は一ではなくして多である。されば純粹に一である一は自分自身を知らぬ。即ち、自己意識を持たぬといはねばならぬ。通常、自己意識はものゝ根本である如く考へられて居るのであるけれども、吾々は日常經驗に於ても、自己意識よりも更に深い、自己意識の出で来る源を観ることができぬ。自己意識はなほ心の最根本の統一といふことはできぬ。従つて自己意識は一の内にはない。自己意識は却つて多の始めと見らるゝことができる。一に於ては決して自他の別はない。一は獨立自存であつて自分自身で自足して居るから要求を持たぬ。自分自身さへも要求せぬ。これは、消極的の意味ではなくして一、自身の積極的意味である。要求がないから一は一切の欲望から超越したとこ

ろがある。一は又自身によつても復、他のものによつても造られたるものではない。もし一が造られたるものであるならば、以外にそれを造るものがなければならぬ。これは一の本質に矛盾する。それ故、一は被造物といふことはできぬ。併し又嚴密にいふと造物者であるといふこともできぬ。もし一が創造するといはゞ、自分と異つたものを自分自身から、或は他のものから造ることゝなる。かゝることは一に取つてはあり得ないことである。されば、一が萬物の源泉であるといふことは普通にいふ創造とは別の意味に於て解せられねばならぬ。

一は時としてプロテイヌスによつて善といふ概念でいひ表はされて居るが、この善は通常の善の如く倫理的性質を含んだものではない。もしも倫理的なものである時には、悪といふ他のものとの關係におかるゝのである。しかし、一は凡てのものに對する關係を超越するものであるから悪と相對的の善と見らるゝことはできぬ。只、これは一切萬有の最終の目的であるといふ點に於て善といはれて居るのである。即ち、倫理的方面より見るも最後の目的は絶對者であつて、善惡を越えた境地でなければならぬから、それによつて善と名けたに過ぎぬ。故に實際は超越善と稱すべきである。一が美の美であるといはるゝのも同じ理由によるのである。一は善であ

るとか美であるとかいふやうな性質はあり得ないのである。

一は又時々意志として考へられて居るが、この場合の意志は普通、心理學でいふやうな意味での意志ではない。通常、意志は自分以外の何かある對象を豫想し、その對象に對してあらはれる心のはたらきであるが、一は一であつて自分のはたらくに他の對象を要求するやうなものではない。のみならずたとひ主意識者のいふ如く意志が心の根本的のはたらきであるにしても意志に於ては、その作用と對象との間には除くべからざる二元性が潜在して居るから一を意志であるとすることはできぬのである。又、一をば無限に發展する創造的活動と見ることでもできぬ。何とならば、無限に發展するといはゞ時間的か或は空間的に發展するものと見ねばならぬ。然るに、一は時間のない永劫であり、空間のない遍在であつて、その中には發展といふことが常に取るやうな過去、現在、未來とかいふ様式とか、活動の立つ出發點とか、その向ふ目的地とかいふやうな此處、彼處の差別はあり得ないのである。むしろ出發點と目的地とが同處に在り、過去と未來とが同時にあるやうなものである。それ故、もしも一を活動であるとするならば、それが活動する前にすでにその活動が完成されて居る活動であるといはねばならぬ。かゝるものは普通の活動とは異つたもので



あるけれども、一方より見れば一切活動の最も完全なるものであつて、同時に又一切静止の最も完全なる静止である。従つてかゝるものは生滅變化のあるべき筈のものではない。生前、死後といふことは相對的活動の世界に於てのみあり得るに過ぎぬ。もし生であるとするとするならばそれは始めもなく終りもない永恆の生である。

一は又、普通いふやうな意味での愛であるといふこともできぬ。愛は常に多の統一を意味するが故に、愛の成立には多様性を豫想する。従つて愛は一ではない。往々、唯一の神の本質は愛であると考へられるのであるが、唯一神に取つては自分以外の他のものをその愛の對象として持つといふことは矛盾である。しかし、今、一切のものは一に於て一であると見れば、一は些の憎惡をも含まぬ絶對博愛であると見ることがもできる。一には隣人があるべき筈はない。何とならば一に取つては凡ての隣人は隣人にあらずして一、自身であるからである。換言すれば、一に於ては一、が一であるといふことの外に愛といふことはない。又、一は理想主義の人々のいふやうな意味での最高理想といふやうなものではない。何とならば理想は現實に存在せぬ未來に於て實現する要求である。それ故、理想には常に現實が對立するのであるが、一に於ては理想と現實との差別があるべきでない。理想としていへば、一切の現

實は理想であり、現實よりいへば一切の理想は現實である。

上に於て吾々はプロテイエスの一、がいかなる性質のものであるか、またいかなるものであつてはならぬかといふことを考察して來た。しかし、こゝに問題となることは、そのやうな一、が何故に存在しなければならぬかといふことである。若しもこの問題が何等かの方法で解かれなかつたならば、一、があるといふことは單にプロテイエスの獨斷的假定に過ぎざるもので、何等客觀的根據のないことゝいはねばならぬであらう。然らば彼はこの問題をいかに解決したであらうか。彼は一、が存在するといふことを知る二つの方法があると考へた。一は體驗によつて一、と合一し、直接にそれを知るとであり、他は理論的思辯によつてその存在を論證するとである。プロテイエスによると、眞に一、を知るには畢竟第一の方法によらなければならぬのであるが、然らばとて彼は第二の方法を全然捨てたわけではない。吾々は先づ彼が一、の存在をいかに論證したかを明かにしてみよう。彼は一、の存在の必然性の證明をば、凡そ通常存在すると稱せられて居るものはいかにして存在し得るかといふこ

この吟味より出發して居る。今、吾々が日常經驗する事物を考察するに何れも一つとして多でないものはない。純粹に一と稱せらるゝものはないのである。然るに、この多が集合して何かそこに一つの存在を持つにいたるのは何によつてであるか。もし、多が多であつたならば決して存在と稱せらるものゝ成立する筈はない。そこで存在を成立せしめるもの、即ち、事物に對して存在性を附與するものがなければならぬ。プロテイエスはそれが一であるとか考へたのである。もし、一が一でなかつたならば多を一つのものとなすことはできない筈である。この場合に一によつて存在するものは多をその内容として持つて居るから、一であるとはいはれない。一は一によつて存在する一つのものではなくして、その一つのものを成立せしめる原理そのものである。即ち、それなくしては、多の内容を持つ一つの存在物が成立するこゝとができるいどころの原理である。又、凡そあるものは何かによつてあるのである。然らば、そこに又一切のものが最後によるところのものがなければならぬ。即ち、ものがよつてもつて存在するところの第一原理がなければならぬ。プロテイエスはこの第一原理は一、でなければならぬと考へたのである。蓋し、第一原理は凡てのものゝ原理であるが故に最初であり、純一でなければならぬ。もし、最初でないならば

そのものは更に最初なるものを要し、純一でなくして複合的なものであるならばその複合的なるものゝよつてもつて起るところの更に純一なるものを要するわけである。それ故、第一原理は凡てのものゝ最初であり、絶對に純一無雜のものでなければならぬ。而して、そのやうなものはさきへのべられたやうな性質の一でなければならぬ。

プロテイヌスはかくて一切の存在物に存在を附與する根本原理として一の必然性を論證したのであるが、かくの如くして論證された一はなほ眞の具體的の一であるといふことはできぬであらう。何とならば、一は一切の相對を絶するものであるから言語によつても、學問によつても、理性によつても達することのできぬ筈のものである。一はされば論證によつて甫めてその存在が立てられるやうなものではない。一は何等他のものゝ保證を要せずしてそれ自身獨自に存在するものであつて、一を知るもの、一を論證するものをまつてはじめて存在するやうなものではなくして、知るとか、論證するとかいふことから獨立に嚴然と存在するものである。否、むしろ知るとか、論證するとかいふ作用そのものも一なくしてはあり得ないのである。然らば、論證によらずして一はいかにして吾々に知らるゝことができるか。それは

吾々が一切のものを放擲し去ることによつて可能である。何とならば一は一切のものを超越したものであるからである。吾々の身體はもとより、一切の精神も、更に一さへもすて去らねばならぬ。一切をすてたるところに一は現前するのである。一に到つて甫めて一を知ることが出来る。即ち、一のみ一を知ることが出来る。しかしそこにはもはや知らるゝ一と知る一との別はない。プロテイスが三昧と稱したのはこの境地である。かくて、三昧は一切の相對、即ち、一切の存在を超越することであるが、これは又精神がその源に還ることである。通常、精神は多の中にある。人間の精神は身體と結合し、隨つて五官と結合し、五官によつて五境と關係し、外に向けられ、多に向けられ、これによつて束縛せられ支配せられて居る。かくて精神は相對の世界、多の世界、變化の世界に流轉沈淪して眞の己れを見ることはできぬ。それ故精神が眞の己れを見んと欲するならば外から内に向はねばならぬ。而して更に、自己を見るものは自己であるといふ境地、即ち、知的直觀の境地に至らねばならぬ。しかし知的直觀も尙且純粹なるものではない、精神自身の本源は更にこの知的直觀をも超越した。純粹に見るものもなく、見らるゝものもなき状態でなければならぬ。この状態が眞の一である。こゝに於ては一切の活動、變化は終息し、凡ての多は消逸

し、あらゆる相對は影をひそめ、只、絕對唯一の光があるのみである。この時この光は何物の中にもなくして、一切のものゝ中に遍在し、何處よりも來らずして、一切處に行くのである。精神は一切處に於て神と共にある。神と共にあるとは神以外に何物もないといふことである。而して、この神光の照すところ、一切のものはこの光と變ずるのである。

さきへのべたる如き一、の姿は、プロテイヌスがかゝる神祕的三昧の境地の體驗より得來りたるものであるから、單なる論理的概念であるとはいはれないのである。それ故、プロテイヌスのいふところの一、の存在と、その眞面目とを知らんとするものは、一、とならねばならぬ。即ち、吾々は一、を體驗自證することによつてのみ一、の確證を得ることができるのである。思惟を超越するものを思惟によつて論證せんとするも到底完全になし得ないことは明かなことである。プロテイヌスは、それ故、光の譬喩によつて一、を悟らしめんとし、又、嚴正なる禁欲主義によつて人間の精神を内に向はしめ、精神の深奥に祕在する一、に到らしめて、それを體得せしめんとしたのである。

(この一片は極めて蕪雜なものであるが暫く以て稿約の責に補す)